日本風工学会 2008 年度出版賞を受賞して

牛山 泉*

Izumi USHIYAMA

このたび権威ある日本風工学会の 2008 年度出版賞をいただくことができましたことは、身に余る光栄であり、大変ありがたく存じます。日本風工学会は風の害を研究する方々が多く、その分野では世界の最先端の研究が多くなされておりますが、私のように風を利用する立場の研究者は少ないのが実情であり、その異端者がこのような賞をいただいてもよいのかと恐縮する次第でもあります。

表彰委員会による本書の受賞理由は「本書は、風とはどういう性質を持っているか、私たちは古来、風をいかに生活のために利用してきたか、風の利用手段として風車はどのように発達し、現状はどうなっているのか。また、人類の将来を考える上での自然エネルギーの利用、特に風車の果たす役割は何か、等々について解説した啓発書である。この本には、風に関するエピソードが随所に盛り込まれており、読み物としても小説なみにおもしろいものとなっている。その意味で、この本は他の専門知識の解説書や啓発書に比較して、格段に一般の人の興味を引くものとなっており、風のような様々な問題に対して、広く啓発することに大きく貢献するものと思われる。また、挿入されているエピソードをはじめ、風車の詳細な歴史は専門家にとっても、きわめて参考になり、風工学の入門書としても十分に価値あるものである。この本の最後には、筆者が大学で展開している風車等をはじめとする教育的な試みも紹介されており、研究の社会的な普及についても参考にするところが大きい。以上の理由から、「風と風車のはなし」に日本風工学会出版賞を授賞する。」となっております。過分の評価に忸怩たる思いがありますが、本書は私にとって、いろいろな意味で思い出に残る著書となりました。

そのひとつは、これまでに何冊か出している風車関連の専門書と違って、大学のオープンキャンパスなどで、高校生に持ち帰ってもらって読んでもらえればと考えて、高校生にもわかるようにということを意識して書いたこと、大学の取り組みを知ってもらうために足利工業大学の風力や自然エネルギー関連の活動についても紹介していること、などが特徴であります。し

たがって、啓発書として評価されたことは、一応の目標には達したのではないかと考えております。

今、この原稿は本学の姉妹校であるアメリカ・イリノイ大学スプリングフィールド校との提携更新の調印のために訪米し、同学がゲストのために時々使っているカトリックの研修センターで記しています。4 年前に来たときにはハリケーン・カトリーナがニューオーリンズを襲い大きな被害を出しましたが、今日も自動車で移動中に強烈なトネードが襲来し、わずか 30 分の間にスプリングフィールド付近には大きな被害が発生しました。まさに強風に歓迎されているように感じております。

折りしも、オバマ大統領は選出前と選出後にグリーン・ニュー・ディール政策について 2 回演説しておりますが、その場所はいずれも風車工場であり、彼がいかに風力発電産業に期待しているかを示すものといえます。さらに、風力の導入目標については、2030 年までに全米の電力消費の 20% を風力でまかなうと宣言しています。この画期的な目標を達成するためには風の恵と風の害の課題を同時に解決する必要があり、風工学に期待するところがきわめて大きいといえます。

私にとっては、このたびの受賞はさらに今後の研究を進めるようにという励ましと受けとめておりますので、今後とも皆様のご指導をお願いしたいと願っております。最後に、本書のあとがきに昨年 7 月に召天したマイネ・リーベ・フラウ富士子に対する謝辞も記しており、彼女も天国で喜んでいるものと思います。

* 足利工業大学大学院工学研究科 教授
Professor, Ashikaga Institute of Technology